

シヤカの神格化について（二）

小
畑
進

一、シヤカの伝記

(1)	誕生—出家	………	54
(2)	修行—初転法輪	………	56
(3)	伝道・弟子たち	………	60
(4)	望郷・老衰	………	65
(5)	旅路の果て	………	69
(6)	入滅・火葬	………	77
〈略号〉	………	………	85

一、シャカの伝記

(1) 誕生―出家

佛教の開祖シャカは、今日のネパール地方、タラーイ平原に居住していたチベット系モンゴル種族で、黄色人種かとも思われるシャーキヤ族 (s: Śākya, p: Śākya) の中心地カピラヴァスト (s: Kapilavastu, p: Kapilavastu 迦毘羅衛城) で生まれた。シャーキヤ族は西の大国コーサラに従属しながら共和制をとり、父は執政官シュッドダーナ (s: Suddhodana, p: Suddhodana 浄飯王)、母は東隣りの同じく小国コーリヤ族の執政官の娘ママーヤ (s, p: Māyā 摩耶夫人) であった。

* シャーキヤ族は「アーリア人種ではなくて、広い意味でのモンゴル人種であったと推定する」(渡辺照宏『日本仏教のこころ』(日本の仏教15、筑摩書房、一〇五頁)。「釈迦族はインドアリヤン人には属さなかったと結論せざるをえない」(岩本裕『佛教入門』中公新書32、七頁)。

* 誕生ののちに「七歩歩んだという」神話伝説は遅い漢訳佛典に出てくる。「四月八日夜、明星の出づる時に到り、化して右脇従り生まれて地に堕ち、即ち行くこと七歩、右手を挙げて住して言えらく、『天上天下、唯我を尊しと為す。三界は皆苦にして、何の樂しむべき者ぞ』と、是の時、天地大いに動き、宮中悉く明らかなり。」(呉の支謙訳『太子瑞應本起経』(大正蔵、三卷、四七三頁下)。「天上天下唯我独尊」句も同じ。「天上天下唯我為尊、要度三衆生生老病死」(『長阿含経』第一卷、大本経、大正蔵、一卷、四頁下)など。『天上天下唯我独尊』の意味のことは、釈尊が成道後、ベナレスに向かわれる途中で異学のウパカに述べられた言葉に見いだされるから、史実としては、この記事を後の伝記作者が、誕

生時の語として持つてきたものであろう。」(水野弘元『釈尊の生涯』春秋社、四五頁)

その誕生は渡辺照宏説(BC五六〇年頃)、宇井伯寿説(BC四六六年)、中村 元説(BC四六三年)。南方伝承によるとヴァイシャーカ(s: Vaisāka 吠舍佉)、ウェサーカ(p: Vesāka 第二月祭)の月(四月の末頃)の満月の日とされる。

家系名はゴータマ(s: Gautama, p: Gotama 喬多摩・瞿曇・最上の牛)、名をシッタールタ(s: Siddhārtha, p: Siddhatha 悉達多・悉陀)。シャーキヤ族出身の聖者という意味で釈迦牟尼(Sākya-muni)。略して釈尊と呼ばれ、覺者として佛陀(s: Buddha)。世尊(s: Bhagavat 婆伽梵)は尊称である。

マヤー夫人が出産のために実家のデーヴァダハ(s: Devadaha 天臂城)へ赴く途中、ルンビニー遊園(s: Lumbini 藍毘尼園)で誕生した。七日後に生母マヤーは死亡。その妹にあたるマハープラジャーパティー(s: Mahāprajāpati 摩訶波羅闍波提・大愛道)に養育されることとなる。この養母はシャカの異母弟のナンダ(s: Nanda 難陀)を生み、のち最初の尼僧となる女性である。

* 七日後の母の死について、「ボーディサッタが宿った母胎は、靈廟の奥殿のようなもので、他の者が宿ったり用いたりすることができないから、ボーディサッタの母は、ボーディサッタが誕生して七日後に死んで、トウシタ天の都に生まれるのである。」(Jātaka Vol. I, 52. 『ジャータカ全集』I 春秋社、五九頁)と解されるのは、マリヤ童貞説に通じよう。

長じて、シャカは三人の妃をもつが、母方の従妹の第一妃で、のち多聞第一と称せられるアーナンダ(s: Ānanda 阿難陀)、破僧の反逆児デーヴァダッタ(s: Devadatta 提婆達多)の姉にあたるヤシヨダーラ(s: Yasodharā 耶輸陀羅)との間に一子ラーフラ(s: Rāhula 羅睺羅「妨げ」「月蝕」の意とも)をもうける

(2) 修行—初轉法輪

こうして、マガタ国のウルヴィルヴァー(s:Uruviva 現在のウレル村 Urel)での苦行林生活に入った。一粒の胡麻や米粒で日を過ごしたり、断食したり、息を止める瞑想に入ったり、牛糞や自分の小便を飲んだり、鬚髪を抜き取る修行など、その身には塵垢がたまって苔が生ずるといふ凄まじい苦行(s:tapas)を五人の修行者と共にすること六年であったが、「それはまるで空中に結び目を作ろうとするような〔徒勞の〕歲月であった。かれは『この難行はさとりにはいたる道ではない』と考え、通常の食物をとるために、村や街で托鉢した。

て食物を得られた。」[Jataka, Vol. 1, P. 67. 『ジャータカ全集』Ⅰ、春秋社、七八頁]

五人衆と別れて、ナイランジャーナー河 (s: Nairañña) 尼連禪河、現在のパルグ河の西側の一支流) で沐浴。村娘スジャーター (p: Sujāta「善生」) がさるる乳糜にゅうびを食して氣力を回復する。ここに禪定至上主義は斥けられ、断食・止息などの苦行主義と欲楽にふける快樂主義もまた斥けられて、苦樂二辺を離れる。不苦不樂の中道が開かれる。

ブッダガヤー (s: Buddhagayā「仏陀伽耶」) のピッパラ大樹 (s: pippala「無花果属の半落葉高木で、アシヴァッタ樹 s: asvattha のこと」) 下に吉祥草を敷いて瞑想禪定に入り、陰曆十二月八日の未明、「一見明星」、苦悩とその原因に関する「縁起」の理を大悟して涅槃成道、覺者 (Buddha) となった。

* 律藏・大品 (Vinaya, Mahāvagga, I, 1, 1-7) には十二因縁の理をさとしたとされているが、これは後世に整理されたもの。

「至高完全の悟り」(無上正等覺・阿耨多羅三藐菩提あのかたらしんみやくさんぽうだい) を見いだして、ゴータマ・シッダールタは「ゴータマ・ブッダ」となった。文字どおり「無師独悟」であり、それゆえ佛教の開祖となったわけである。時に三十五歳(宇井説によればBC四三一年)とされる。以後、ピッパラ樹も「菩提樹」(s: Bodhidrama「覺樹・思惟樹・道場樹・道樹」) と呼ばれることとなった。

成道後、二人の旧師に伝えようとしたが両師ともこの世に亡く、旧友五人をカーシー国のヴァーラーナシī (s: Vārāṇasī「現在ベナレスの北サルナート」) 郊外ムリガダーヴァ (s: Mṛgadāva「鹿野苑」) に訪ねて教化しようとして旅立つ。その途中、ジナ教に近いアージーヴィカ教に属する苦行者ウパカ (s: Upaka) に出会う。ウパカは、「尊者よ、あなたのもろもろの器官は清浄であり、皮膚の色は清らかで純白であります。尊者よ。

あなたは何を目ざして出家したのですか。あなたの師はどれですか？あなたは誰の教えを信受しているのですか？」と問う。これに対して、シヤカは詩句で応答する。

「わたくしは一切にうち勝った者、一切を知る者である。一切のものと汚されていない。すべてを捨てて、妄執をなくしたから解脱している。みずから知ったならば、だれを〔師と〕めざすであろうか。われには師は存在しない。われに似た者は存在しない。神々を含めた世界のうちに、われに比敵し得る者は存在しない。われこそは世間において尊敬されるべき人である。われは無上の師である。われは唯一なる正覺者である。われは清涼となり、やすらいに帰している。法輪を転ぜんがために、わたくしはカーシー（ベナレス）の町に往く。盲闇の世界において不死の鼓を打とう。」と。（MN, vol I, pp. 170-171）

ここには、従来の伝統・教説との断絶、覺者たるの確信、無師独自の立場、清涼安心の境地、不死の鼓をうつつの伝道熱が圧倒的に表明されている。もつとも、ウパカは「尊者よ、そうかもしれない」と頭を振って去る。ウパカの機が熟していなかったか、ブツダとして最初の異教徒説得に失敗したとも言われる。みずからさとした内容の説法においてまだ不用意であった、と。

＊ブツダガヤーからヴァーラーナシーまでは直線距離にして二〇〇キロメートル。街道をたどれば三〇〇キロメートルで、徒歩十日の長旅となる。

ガンジス河を渡ったシヤカは現在のサールナート、鹿野苑に旧友五人を訪ねた。「さて、わたくしは順次に遊歩して、ベナレス・仙人の住処・鹿の園なるところに、五人の修行者の群れのいるところにおもむいた。五人の修行者の群れは遙かにわたしがくるのを見た。見て相互に約束していった。――『きみよ、道の人ゴータマがあそこにやってくる。贅沢で、つとめはげむのを捨て、奢侈におもむいた。かれに挨拶すべきではな

い。起って迎えてはならない。かれの衣鉢を受けてはならない。しかし座を設けてやらねばなるまい。もしもかれが欲するならば、坐し得るように」と。ところがわたくしが近づくにつれて、五人の修行者の群れは、自分らの約束で制することができなかった。あるものどもはわたくしを出迎えて衣鉢を受け取った。またある者どもは座を設けた。またある者どもは洗足の水を用意した。」(MN. Vol. I, p. 171)

「さらにまたわたくしの名を呼び、また『きみよ (āvuso)』という呼びかけをもって話しかけた。このように話しかけられたときに、わたくしは五人の修行者の群れにこのようにいった。『修行者らよ。如来に呼びかけるのに名をいい、また『きみよ』という呼びかけをもって如来に話しかけてはならぬ。如来は尊敬されるべき人、正覺者である。修行者ども、耳を傾けよ。不死が得られた。わたくしは教えるであろう。わたくしは法を説くであろう。』」(MN. Vol. I, pp. 171-172)

かくして『初転法輪』となる。「修行者らよ。出家者が実践してはならない二つの極端がある。その二つとは何であるか？一つはもろもろの欲望において欲樂に耽ることであって、下劣・野卑で凡愚の行ないで、高尚ならず、ためにならぬものである。他の一つはみずから苦しめることであって、苦しみであり、高尚ならず、ためにならぬものである。真理の体現者はこの両極端に近づくかないで、中道 (s: *madhyama pratipad*, p: *majjhima patipada*) をさとしたのである。それは眼を生じ認識を生じ、平安・超人知・正しいさと・安らぎ (ニルヴァーナ) に向かうものである。」(『転法輪經』SN. LVII, 11. Vol. V, pp. 420-424 『律藏』Vinaya, Mahāvagga, I, 6, 17f. Vol. I, P. 10f.) と、中道を掲げ、四諦、八正道を説法した。こうして、コンダンニヤを初め五人衆は信従する。僧伽の成立である。コンダンニヤに、塵なく汚れなき真理を見る目が生じるや、シヤカが発した「ああ、コンダンニヤはさとしたのだ！ああ、コンダンニヤはさとしたのだ！」という声は伝

道者の知る感歎である。

(3) 伝道・弟子たち

バーラーナシーでは長者の子ヤサ (p: Yasa) が出家する。ヤサは侍女たちの醜い寝姿に、「ああ、悩ましい。ああ、煩わしい。」といい、戸外でぞろぞろ歩きをしているシャカから、布施(施)・戒め(戒)・天界に生まれる(生天)の訓話から四諦を聴く。ヤサ一家は帰依して、ヤサは出家する。その友人たちもつづく。次いで、東方のマガダ国はなつかしの修行地ウルヴィルバーに向った。途中、逃亡した遊女を探す青年に、「婦女をたずねることと自己をたずねることと、どちらが勝れているか」と問いかけ、これまた施(せ)・戒(かい)・生天の通説訓話から四諦を説いて、青年とその友人三十人が出家する。ウルヴィルバーでは高名な拝火バラモン(事火外道)の老カーシャパ (p: Kāśyapa, s: Kassapa 迦葉) の三兄弟とその弟子一千人を得る。事火外道は呪術を誇っていたが、シャカが神通力を發揮して、火を左右するのに降参し、ほら貝結びの髪を剃り落とし、事火具を水に流して出家した。バラモン教に対する勝利であった。近くの開悟の地ブツダガヤー近郊のガヤーシーサ山 (p: Gayāsīsa, s: Gāyasirsa 象頭山) では、「火」を題材に、眼・耳・鼻・舌・意に燃える貪りの火を厭うて解脱をすすめる、一千人が信従する。(Vinaya, Mahāvagga, I, 21)

やがて、マガダの国都ラージャガハ (p: Rājagaha, s: Rājagṛha 王舎城) ではセーニャ・ビンビサーラ王 (s: Seniya Bimbisāra 頻婆娑羅) が帰依する。やがて信従したカーシャパ三兄弟の長兄ウルヴィルヴァー・カーシヤパが証しをつとめると、シャカは施・戒・生天訓話から苦と苦の滅を説いた。ビンビサーラ王は、

「以前にわたしは王子であつたとき、五つの願いをたてましたが、いまわたしはそれらを成就しました。以前にわたしが王子であつたとき、このように思いました。―へああ、わたしは灌頂を受けて王位につきたい」と。これがわたしの第一のねがいでありましたが、いまわたしはそれを成就しています。へわたしの領土には、真人・正しくさつた人が到来しますように」というこのことが、わたしの第二の願いでありましたが、いまわたしはそれを成就しています。また、へわたしはかの尊師に侍りたい」ということが、わたしの第三の願いでありましたが、いまわたしはそれを成就しています。またへかの尊師はわたしに教えを説かれますように」というこのことが、わたしの第四の願いでありましたが、いまわたしはそれを成就しています。さらにへわたしがかの尊師の教えを理解できますように」というこのことが、わたしの第五の願いでありましたが、いまわたしはそれを成就しています。尊い方よ。以前にわたしが王子であつたとき、五つの願いをたてましたが、いまわたしはそれらを成就しました。」(Vinaya, Mahavagga I, 22)

王はラージャガハの北の池畔にある竹林園に精舎を建てて寄進した。「竹林精舎」(s: Venuvana-vihara) である。

＊比丘の住所としては、阿蘭若あらんにや(人里離れた林野)、樹下、山岳、溪谷、山窟、墓場、森林、野外、わら積みなどが律蔵に説かれている。(南伝四、二二五頁)

このラージャガハには六師外道の一人、懷疑論者のサンジャヤ (p: Sañjaya Belatthiputta 刪闍耶毘羅胝子) が二百五十人のバラモンをひきいていた。サーリプッタ (p: Sāriputta, s: Sāriputra 舍利弗) とモッガラーナ (p: Moggallāna, s: Maudgalyāyana 目犍連) の二人の弟子は、アッサジ (p: Assaji) 比丘から、「もろもろの事がらは原因から生じる。真理の体現者はその原因を説きたまう。またそれらの止滅をも説かれる。大なる修行者はこのように説きたまう。」(Vinaya, Vol. I, pp. 40; 40) と聞いて、サンジャヤに別れて出家した。

モツガラナは七日で、サーリプッタは半月で聖境に達した。二人は懷疑論・判断中止を越えて、因縁の原理・縁起の道理を開眼したのである。サーリプッタは智慧第一、モツガラナは神通第一（孟蘭盆の孝子）の大弟子となる。また頭陀行第一とうたわれるマハーカッサパ (p: Mahā-kassapa, s: Mahākassapa 摩訶迦葉) や、チャンナ (p: Channa 闍陀)、カールダーイン (p: Kāḷudāyin 迦留陀夷) らが加えられた。

* マハーカッサパはバラモンの家に生まれ、結婚したが、夫婦揃って出家した。シャカに師事して八日目には悟り、阿羅漢となった。その時、自分が着ていた新しい袈裟をシャカに献じ、シャカの古い袈裟を貰い受けて常用した。そのボロ姿が軽蔑されることのないように、シャカは半座をわかつて坐らせたこともある。（雑阿含二一四三経など）

ラージャガハで二ヶ月止住ののち、シャカは故郷カピラヴァスツを訪れる。入滅の八十まで、四十五年間、活動の二大拠点とした東のマガダ国のラージャガハ（王舎城）と西のコーサラ国のサーヴァッティ（舎衛城）を往来する際には、故郷を通過したわけだが、この初帰郷は成道後第二年、第六年、第十二年という説がある。昔ながら形式的なバラモン教の故郷での伝道は実を結び、父と養母の帰依、異母弟で諸根調伏第一となるナンダ、理髪師の子で持律第一となるウパーリ、従弟で多聞第一のアーナンダが出家した。実子ラーフラの出家については次のような経緯が伝えられている。ラーフラ王子が「わたしに資産をお与えください。」と願うと、父シャカは考えた。「この子は父の財産を望んでいるが、それは転生をともしない苦悩をもたらすものである。そう、かれには（さとり座）で得た七種類の聖なる財産を与えることにしよう。かれをこの超世間的な財産の持ち主にしてやろう」と。そして、サーリプッタをよんで、ラーフラを出家させた、と。シヤカ族のうち五百人が帰依した。（Jataka, Vol. I, pp. 91-92, 『ジャータカ全集』I、春秋社、一〇五頁）

＊「七種類の聖なる財産」(sattavidhanariyadhanan) とは信心 (saddha) 、戒め (sīla) 、内心の恥 (hiri 愧) 、外部への恥 (ottappa 愧) 、博聞 (suta) 、施捨 (cāga) 、智慧 (pañña) の七つの徳目。

シャーキヤ族のカピラヴァスツを挟んで、東のマガダ国と並び栄えていたのが西のコーサラ国で、シャーカ族もこのコーサラ国に属していたから、シャーカは王家に働きかけ、同年令の国王プラセナジツト (s: Prasenajit, p: Pasenadi 波斯匿王^{はしのくおう}) が帰依した。その王子ヴィドウーダバがシャーカ族を全滅させるのだが、それはのちのことである。さて、このコーサラの国都サーヴァッティー (p: Sāvathī, s: Śrāvastī 舍衛城) の長スダッタ (s, p: Sudatta 須達多) は、「孤独な人々に給食する人」 (s: Anāthapiṇḍika 給孤独長者^{あなただいじん}) と呼ばれる慈善家で、商用のためマガダのラージャガハに向いた折、義兄の縁でシャーカに出会って帰依していたが、是非サーヴァッティーで精舎を寄進したいと願い、その熱意に動かされたジェータ (p: Jeta 祇陀^{ぎだ}) 太子がその園林を寄進した。これが「祇陀園」、略して「祇園」と漢訳されている。スダッタ長者はそこに精舎すなわち僧院を建てたので、両者の名をとって「祇樹給孤独園^{ぎじゅきつこどくおん}」と呼ぶ。これが「祇園精舎^{ぎおんしやうじや}」で約二万坪の敷地であった。

＊シャーカは一年のうち、雨季の三ヶ月を安居^{あんじ}と定めていたが、東マガダ国のラージャガハでは五回ないし七回の安居であったのに対し、西コーサラのサーヴァッティーでは二十回安居している。サーヴァッティーに通算二十年過ごしたことになる。(早島鏡正『ゴータマ・ブッダ』講談社、一一七頁)。

また、スダッタは初めジェータ太子の園林を買おうとして黄金を敷きつめた。ということは、土地はさほどもないが、莫大な金銭を蓄積していた商業資本家が抬頭し、貨幣経済の進展が著しかったことを示すのかも知れない (中村元『ゴータマ・ブッダ』春秋社、六九八頁)。

こうして、三十五歳成道から八十歳入滅まで四十五年間は伝道行脚の半生であった。その重要拠点は大マダ国の国都、ラージャガハ（王舎城）の「竹林精舎」と、コーサラ国の国都サーヴァッティー（舎衛城）下の「祇園精舎」で、ガンジス河中流域の楕圓形地帯であった。

その間、ガンジスとジャムナーの合流点、ヴァンサ国都コーサンビー（s: Kosambi）では国王と王妃を帰依させて伝道の拠点にした。また、養母マハー・プラジャーパティーの出家を認めた。尼僧の起源である。

*マハー・プラジャーパティーはシャカ族の女たちと、髪を断ち、法衣をまとって、遙か五百キロほどを徒歩で南方ヴェーサリーのシャカを訪ねて出家を願った。アーナンダが三回とりついても許されなかったが、八つの条件を厳守するならと許可された。その「八敬重法」は、(一)百歳の比丘尼といえども、今日出家した新比丘に対して敬意を払うこと。(二)比丘尼は比丘のいない所に住してはならぬ。(三)比丘尼は半月ごとに比丘から布薩（懺悔）と教誡を受けるべきこと。(四)比丘尼は安居の最後の日に、比丘衆、比丘尼衆の両教団に対して自恣（懺悔・告白）をなすべきこと。(五)比丘尼がこれらの条件を犯せば、両教団に対して、半月マナーッタ（罰役）を行なうべきこと。(六)正学女（式叉摩那。満二十歳前の未成年の出家志願女、沙弥尼）は六つの戒を二ケ年守ったら、両教団に対して比丘尼として出家を願うこと。(七)比丘尼は絶対に比丘をのしつてはならない。(八)比丘尼は比丘に対して文句をいうことはできないが、比丘は比丘尼に関していうことができる。マハー・プラジャーパティーの出家は、成道後十五年から二十年ころか（水野前掲書二三八～二三九頁）

そのほか、サーヴァッティーの兇賊で、殺害した人の指を集めて髪飾りを作ったため「指鬘外道」と呼ばれたアングリマラー（s: Angulimala 央掘摩羅）を帰依せたり（Sohrai Peshawar, No. 49）、処刑直前の群賊五百人を出家させたり（『摩訶僧祇律』第十九、大正藏、一二二卷、三八三下―三八四中）、漁師五百人を帰依

させ、出家させたりしたことが伝えられる（『摩訶僧祇律』第一四卷、『国訳一切経』律部九、四三〇頁）。

この伝道の間にも、悲報は絶えない。マガダ国王ビンピサーラが王子アジャータシャトル（s: Ajātasattu, p: Ajātasattu 阿闍世）に殺害されるかと思えば、コーサラ国王プラセナジットが王子ヴィドゥーダバ（p: Viḍḍabha, s: Virūdhaka 毘琉璃）の王位篡奪に迫られ、マガダに逃亡して惨死している。このヴィドゥーダバによって、シャカ族は滅亡するにいたる。後代の伝説によると、シャカは三度諫止したが、四度目には宿縁と知って阻止することを放棄した。（『五分律』第二卷、三分之五衣法下、大正蔵、二二卷、一四〇下―一四一下、『四分律』第四一巻、衣捷度之三、大正蔵、一三巻、八六〇中―八六一上）。コーサラもマガダのアジャータシャトルによって滅亡することになるが。そして、十大弟子のうち智慧第一のサーリプッタの死、神通第一のモッガラナの死、シャカに代わって教団を率い、アジャータシャトルと世を支配しようとした従弟デーヴァダッタの離反事件が起っている。

(4) 望郷・老衰

八十歳になったシャカはマガダのラージャガハの東北方にある鷲ガ峰（s: Grdhrakūṭa, p: Gijjhakūṭa 鷲山、靈山）を出て、生まれ故郷カピラヴァストゥへ旅立った。

*最後の旅程。ラージャガハ↓バータリプトラ村↓ガンジス渡河↓コーティ村↓ナーディカ村↓ベールバ村（雨期安居）↓ヴァイシャリー↓バンダ村↓ハッティ村↓アンバ村↓ジャンプ村↓ボーガ市↓パーヴァー村↓カクッター河↓クシナーラー。

ガンジス河の北ヴァイシャリー (s: Vaisālī 吠舍離) では遊女アンバパーリー (p: Ambapālī) の所有するマンガール林に止住して、彼女の朝食への招待を受ける。当地の貴族リッチャヴィ族の若者たちは、その先約に、「つまらぬ女の子にしてやられてしまった。」と指を弾いて残念がった。遊女アンバパーリーは手ずから給仕した。シャカは彼女を教え、諭し、励まし、喜ばせて、席を立った。

このアンバパーリー女の林に止住している間、数多くの教えを説いた。たとえば、「戒律とはこのようなものである。精神統一とはこのようなものである。智慧とはこのようなものである。戒律とともに修行して完成された精神統一は大いなる果報をもたらし、大いなる功德がある。智慧とともに修養された心は、もろもろの汚れ、すなわち欲望の汚れ、生存の汚れ、見解の汚れ、無明の汚れからまったく解脱する。」(MPS. II, 20. DN. Vol. II, P. 98) など。

奥の細道紀行の「市振^{いふり}」で遊女と同宿した芭蕉の場合は、「神明の加護^{つが}かならず恙^{あわれ}なかるべし、と言捨て出つゝ、哀^{あわれ}さしばらくやまざりけらし」と詠嘆の調べだが、シャカはアンバパーリーに三帰五戒を説いたことになっている。『遊行経』大正蔵一卷、一三頁中一下。「まことに汝らに告ぐ、取税人と遊女とは汝らに先だちて神の国に入るなり。」と言った積極的な発言は聞かれないが。(マタイ福音書二一・三一。ルカ福音書七・三七―五〇)。

のちに、アンバパーリーは、子のコンダンニャによって出家して尼となつたらしく、その告白が『尼僧の告白』に残されている。

「(かつて) わたしの頭は、芳香ある篋^{はこ}のように香りがしみこみ、花が覆い飾られていました。しかし、いまは老いのため、それは兎の毛のような臭いがします。真理を語るかたのことはに、誤りはありません。

……わたしの両方の乳房は、昔は、豊かにふくらんで円く、均整がとれて、上に向いていましたが、「いまや」それらは、水の入っていない皮袋のように垂れ下がってしまいました。真理を語るかたのことはに、誤りはありません。わたしの身体は、よく磨いた黄金の板のように、昔は美しかったのですが、いまでは、細かい皺で覆われています。真理を語るかたのことはに、誤りはありません。わたしの両腿は、昔は、象の鼻にも似て立派でありましたが、いまでは老いのために、竹の幹のように「やせました」。真理を語るかたのことはに、誤りはありません。わたしの両脛は、昔は、滑らかな足環をはめ、黄金で飾られ、美しかったのですが、いまでは老いのために、それらは胡麻がらのようになってしまいました。真理を語るかたのことはに、誤りはありません。……このように、より集まって出来ているこの身は、老いさらばえて、多くの苦しみのむらがる場所です。それは、塗料の剥げ落ちたあばら家です。真理を語るかたのことはに、誤りはありません。アンバパーニ」(Therī-gāthā 252-270. また、25-26 のアッダカーシーニの偈も参照。)

ヴァイシャーリー郊外の小村ベールバ (p: Belva-gāṇaka 竹林の村) に移った一行は雨季の定住に入る。インド暦四月の満月の翌日から三ヶ月九十日間の雨安居・夏安居である。そこでシヤカは死ぬほどの激痛をとまなう病いに襲われる。回復したものの、老いを覚えて死を予感する。そして、「教師の握拳」、「自灯明・法灯明・自洲・法洲」の説法を残すこととなる。

「アーナンダよ。修行僧たちはわたくしに何を期待するのであるか？ わたくしは内外の隔てなしに「ことごとく」理法を説いた。全き人の教えには、なにものかを弟子に隠すような教師の握り拳 (p: a cariyamutti) は存在しない。……

アーナンドよ。わたくしはもう古い朽ち、齢をかさね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齢に達した。わが齢は八十となった。たとえば古ぼけた車が革紐の助けによってやっと動いて行くように、おそらくわたくしの身体も革紐の助けによってもっているのだ。

しかし、向上につとめる人が一切の相をこころにとどめることなく若干の感受を減ぼしたことによって、相のない心の統一に入ってとどまるとき、そのとき、かれの身体は健全（快適）なのである。

それゆえに、この世で自らを島とし、自らをたよりとして、他のものをたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとするな。」(MPS, II, 25-26, DN, Vol. II, P. 100)と。

秘伝なるものではなく一切を公開した。それゆえ、その教法と自己のみをたよりとせよ、わたくしは世を去るもの、と。

*『島』(s: atmadvipa, p: attadipa)を「灯明」(p: dipa)と解すると、「自洲・法洲」でなく「自灯明、法灯明」となる。『自らを島とし』というときの『島』は『洲』と訳したほうがよいかもしれない。インドでは大洪水になると一面に水びたしになり、まわりに山が見えないから、どちらを向いても大海原となる。そのなかでところどころに残っている洲が人々のよるべとなるので、それにたとえているのである。……対岸が見えなくなるほどの大洪水を経験することのない日本人々には、『自己を洲とする』とか『法を洲とする』という表現はどうも身にピツタリとしない。そこで『自灯明』『法灯明』という連想のほうが受け取りやすいのである。」(中村前掲書Ⅱ、一九一、一九五頁)

人は老いさき短しと知ると、山も川も、木も草も情緒をそそののか、シャカは八十老として詩情を吐露す

る。

「ヴリジ族の土地・ヴァイシャーリーは楽しい。チャーパーラ靈樹の地は楽しい。七本のマンゴー樹のある靈樹の地は楽しい。葉の繁った靈樹の地は楽しい。ガウタマと名づけるバニヤン樹は楽しい。シャーラ（沙羅）樹の林は楽しい。ヘマツラ族の荷をおろしたところへという靈樹の地は楽しい。ヘ猿池の堤へという靈樹の地は楽しい。世界は美しいもので、人間の生命は甘美なものだ。」(Waldschmidt Skt. Das Mahāparinirvāṇasūtra XV, 9, S. 204)

二度とその緑陰に憩うことのなかるう当地の樹々を眺めて、万感胸にせまったシャカの姿を佛典は「象王回首」と表現した。

(5) 旅路の果て

ヴァイシャーリーをあとに、村々をへ、ボーガ (Bhoga 享樂) 市では、「四大教法」(p: mahāpadāsa) が説かれ、仏滅後に正真の仏語か否かを判定する規準とされる。これも経や律がまとめられた後世の仮託と思われる。「それらの文句を、「ひとつずつ」經典にひき合わせ、戒律に参照吟味してみても、經典〔の文句〕にも合致せず、戒律〔の文句〕にも一致しないときには、この結論に到達すべきである、――へたしかに、これはかの導師の説かれたことばではなくて、この修行僧の誤解したことである」と。修行僧よ。それゆえに、おまえたちはこれを放棄すべきである。」以下、四項目にわたって、同様に、長老耆宿きしやくから聞いたということも経と律に照らして判定すべし」と。(MPS. IV, 5-12. DN. Vol. II, pp. 123-126)

パーヴァー村 (p: Pavā, s: Pāvā) に入つて、鍛冶工の子チユンダ (p: Cunda 淳陀、准陀) の饗応を受け

る。その朝食をとったシャカは重病に倒れる。チュンダの用意した料理のため激しい下痢に見舞われたのである。

「さて尊師が鍛冶工の子チュンダの食物を食べられたとき、激しい病いがおこり、赤い血が迸り出る (p: lohita-pakhandika) 死にいたらんとする激しい苦痛が生じた。尊師は実に正しく念い、よく気をおちつけて、悩まされることなく、その苦痛を堪え忍んでいた。

さて尊師は若き人アーナンダに告げられた。『さあ、アーナンダよ、われらはクシナーラにおもむこう』」 (MPS. IV, 20. DN. Vol. II, pp. 127-128)

＊血便、中毒症状のもととなった食物「スーカラマッダヴァ」 (p: sūkara-maddava) には諸説がある。薬草説もあるが、野豚の柔らかい肉か、野豚ごのみの食用茸 (栴檀耳^{せんだんに}) か。「スーカラ」は「豚、猪」、「マッダヴァ」は「やわらかさ、やさしさ」。

＊「元来、この王子は蒲柳の質であり、とくに胃腸などの消化器は普通の人よりも弱かったらしい。佛教の出家教団の風習として、昼住と言って、食後に横臥したり、楽に坐ったりして、静かに休息することが行なわれたのは、おそらく釈尊自身が健康のために習慣としていたものを弟子たちにも及ぼしたものではないかと思われる。(釈尊が食後に横臥して休息されたのを、外教の人たちは、ゴータマは惰眠をむさぼるものであると誹謗したことがあるへ中部三六、大サツチャカ経―南伝九、四三五頁) また釈尊はよく病気をされ、当時の名医ジークワカ (耆婆) の治療を受けられたし、晩年には背の痛みを訴えられたこともしばしばであった。入滅直前の最後の供養においても、釈尊は食中毒かで、痢病 (赤痢) をされ、そのためにこの世を去られることになった。」 (水野弘元『釈尊の生涯』春秋社、三七頁)

この重症にもかかわらず、かえって望郷の念おさえがたく、病軀を運んで最後の地クシナーラー村 (p: Kusināra = Kusinagara, s: Kusinagari 拘尸那揭城) に赴く。道中、一樹の下に近づくと、「さあ、アーナンダよ。おまえはわたくしのために外衣を四つ折りにして敷いてくれ。わたくしは疲れた。わたくしはすわりたい。」として、しきりに水を所望する。近くのククスター河は五百の車が通過したばかりで濁っているから、もう少しさきのカクッター河で、というアーナンダに、「わたくしは、のどが渴いている。アーナンダよ。わたくしは飲みたいのだ。」と、三度も訴える。(MPS, IV, 21-22. DN, Vol. II, P. 128) のちの超人化・神格化されたシャカとは、まさに異なる人間シャカ像であり、痛々しいまでに、その老体・病軀を偲はせる。

こんな折も折、アーラーラ・カーラーマの徒で、マッラ族の大臣であったとも言われるプククサ (p: Pukusa, s: Putkasa) が通りかかる。シャカの禪定の深さに感銘した彼は、「わたしは、アーラーラ・カーラーマに対する信を、大風のうちに吹き飛ばし、奔流のうちに流し去りましょう。……今日から終生帰依する在俗信者として、お受けください。」(MPS, IV, 28-34. DN, Vol. II, pp. 131-133) と、金色の一对の衣を献上した。病苦の中の快事であった。

カクッター河で沐浴し、清流を飲むと、チュンダを励まそうと、彼が供養した食物を受けてニルヴァーナの境地に入るゆえ、最上の功德があると語って、チュンダを思いやった。

ヒラニヤヴァティー河 (p: Hiraṇṇavati, s: Hiraṇyavati) 西岸、クシナーラー (p: Kusināra, s: Kusinagari) の東側、かねて終焉の地と目していたウバヴァッタナ (p: Upavattana) にたどりつく。

『さあ、アーナンダよ。わたくしのために、二本並んだサーラ樹 (p: sāla, sāla) のあいだに、頭を北に向

けて床を用意してくれ。アーナンダよ。わたくしは疲れた。横になりたい』と。『かしこまりました』と、尊師に答えて、アーナンダはサーラの双樹のあいだに、頭を北に向けて床を設けた。そこで尊師は右脇を下につけて、足の上に足を重ね、獅子座をしつらえて、正しく念い、正しくころをとどめていた。」(MPS. V. I. DN. Vol. II, P. 137)

いうところの「沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現わす」の場である。

シャカは、煽いでいた信者ウパヴァーナを「去りなさい。修行僧よ。わたくしの前に立つてはいけない。」と退けるが、それは会いに来ている神霊たちの邪魔になるからだ、と言うことになっている。

この十方世界の神々が最後のシャカに会うために群がり集ってくるということから、死後はもう会えなくなってしまう、とアーナンダは嘆く。これに対して、シャカは「信仰心のあるまじめな人が実際に訪ねて感激する場所」として、その誕生地（ルンビニー園）、成道地（ブッダガヤー）、初転法輪地（鹿野園）、入滅地（クシナラー）の四大霊場巡拝を教え、「アーナンダよ。だれでも祠堂（p: Cetiya）の巡礼をして遍歴し、浄らかな心で死ぬならば、かれらはすべて、死後に、身体が壊れてのちに、よいところ、天の世界に生まれるであろう。」(MPS. V. 7-8. DN. Vol. II, pp. 140-141) と勧めることになっているが、もちろん後世の付文である。

同じく後世の挿入であるが、女性にどのような態度をとったらよいかについての問答は注目される。「尊い方よ。わたしたちは婦人に対してどうしたらよいのでしょうか?」「アーナンダよ。見るな。」「尊師よ。しかし、見てしまったときには、どうしたらよいのでしょうか?」「アーナンダよ。話しかけるな。」「尊い方よ。しかし、話しかけてしまったときには、どうしたらよいのでしょうか?」「アーナンダよ。そういうときには、つつしんでおれ。」(MPS. V. 9. DN. Vol. II, P. 141)

＊仏教と女性という問題点なので、参考にH・ベックの所説を少々長いが抜粋しておこう。

「仏陀としては、当時の時代状態および民族状態にかんがみて、女性問題をそのように決定する他はなかったのである。……この点について、キリスト教の立場の方が上であると感ずることができるとしたところで、仏陀のとった立場がその時代として不当であったとは決して言われない。とにかく、ある点からみると、仏陀がはじめて教えたことが、後になって、この領域で、キリスト教によつてさらに高く、さらに完全に実現された、と言うことができる。なぜかという、仏陀は尼僧を認めることによつて、女性にも宗教生活に参加することを許し、したがって、この決定的であり、もつとも重要な点において、男女同権を承認したのである。『経蔵』の中の『小部經典』に属する『テーリー・ガーター』（長老尼偈）には尼僧たちのこの宗教生活に注目すべき美しい詩が収められてある。……前には、女性を教団に入れることを実際問題として懸念したのであったが、ついにその懸念をすてる。ただしその際に仏陀は、本来ならば一千年のあいだ存続すべきはずであったその教義が、このために五百年しか持たないことになった、と言われたという。この話が真実かどうかは、ここに論じないでおこう。……修行上のあらゆる外面的の問題について尼僧はいつも男僧に従わなければならない、と仏陀は命ぜられた——こういう監督は、当時のインドの文化や法律の事情ぜんたいからみて、当然であり、また、仏陀はどんな場面にも、外面的な既定事実には反対はしなかった。——肝心な宗教生活そのものについては、男女の差別はなかった。したがって仏陀は、たとえ女性についていろいろ激しい言葉といわれるものから推測して、その性格に女嫌いの態度があったと考えることは、まったく誤りである。結婚したという事実から見ても女嫌いではない。……歴史的事実に近いと思われるバーリ語聖典のうちの經典を見ても、仏陀がほんとうに女嫌いであったとは記していない。仏陀は女性の、しかも遊女の、食卓にさえつく——アンババリーの招待を受けたからには、貴族

から招かれても、先約を破らない。——そして、親切に語り、宗教を教えてはげまし、招待した女たちを喜ばせる。これらすべての物語を通じて信じてよいと思われることは、女性たちもまた聖者にまったく特別な、献身的な尊敬を寄せていたことである。仏陀のいう宗教生活を実践するにあたって、女性であることのための弱点ないし困難が、一般的にどのようなものであるにせよ、また、仏陀の時代にはどうであつたにせよ、献身的に尊敬することができるといふのは、いつの時代にも、女性に特有な能力であつて、そのために、別の方面からみると、女性こそそのような宗教生活に容易に入れるはずであり、むしろ女性こそまさしくそれに適しているとさえ思われるのである。仏陀はつねに心靈上の転換を重視されたが、この転換は、悟性的・批判的な人々よりも、崇拜の傾向のある人々の方が行ないやすい。仏陀が、実際問題として困難や不利があることを見とおしていたにもかかわらず、尼僧を認めることにきめたおもな理由の一つは、多分この点であろう。」(Hermann Beckh: Buddhismus-Buddha und seine Lehre, 『仏教』上、岩波文庫、一七一―一七四頁)

つづいて、アーナンダが、「修行完成者のご遺体に対して、われわれはどのようにしたらよいのでしょうか?」と問うたのに対して、「アーナンダよ。お前たちは修行完成者の遺骨の供養(崇拜)にかかずらうな。(avyavata hotha)。どうか。お前たちは、正しい目的のために努力せよ。正しい目的を実行せよ。正しい目的に向かつて怠らず、勤め、専念しておれ。アーナンダよ。王族の賢者たち、バラモンの賢者たち、資産者の賢者たちで、修行完成者(如来)に対して淨らかな信をいだいている人々がいる。かれらが、修行完成者の遺骨の崇拜をなすであろう。」とシャカは答える。

遺骨供養、崇拜は出家修行僧のかかずらうことではないとしているのである。そして、修行完成者(仏陀)、

辟支佛（独覺）、声聞、転輪聖王の四者はストウーパをつくって拝まれるべしと勧められる。（MPS. V, 10-12. DN. Vol. II, P. 142）大乘佛教興起の要因となった佛塔崇拜、霊場巡礼が、付加されたものである。

*「このように仏塔信仰は在家信者によつて始められたものであり、その後も伝統として在家信者によつて護持されたと考えてよい（現在でも、ビルマの仏塔へパコダ^hは信者が委員会を作つて管理運営している。比丘達は仏塔経宮には参加しない。）西紀前後のころになれば、仏塔の建立は非常に多かったのであり……出家者である比丘・比丘尼等も礼拝し、信奉していた。……既に西紀前後の時代から部派教団の寺院の中に仏塔が立てられており、比丘の精舎と仏塔とが並存して、仏塔供養がなされていた。……この土地には仏塔の塔身だけでなく、巡礼者たちの宿舎や、井戸、水浴のための池なども作られたのである。すなわち仏塔にはこれらの財物が所属していた。……しかも仏塔礼拝ということは、観仏三昧に導く点がある。仏塔の前で五体投地の礼拝を何百回となく繰り返すことは、現在でもブツダガヤーでのチベット人の巡礼者などに見られるところである……この仏塔教団が大乘仏教の興起に大きな役割を果たしたと考えるのである。大乘仏典には、菩薩の集団が『菩薩ガナ』(Bodhisattvagāṇa)として「部派僧伽」(Sṛavakasaṅgha)から別に存在していたことを示している。この菩薩ガナの起源を、この仏塔教団に想定することはあながち無理ではないと考える。ただし『般若経』の支持者の起源は仏塔とは別の方向に求むべきである。」（平川彰『インド仏教史』上、春秋社、三四四～三五〇頁。『初期大乘仏教の研究』Ⅱ、二七二～二八二頁）

アーナンダは、いよいよ悲しむ。「ああ、わたしは、まだこれから学ばねばならぬ者であり、まだなすべきことがある。ところが、わたしを憐れんでくださるわが師はお亡くなりになるのだらう。」と。ちょうど同じ

頃、ギリシャのアテネで死を前にするソクラテスに、「父を奪われて、これからの人生を孤児として生きなければならぬような頼りなさ」に泣いたパイドンが重なる。そして、「人は心静かに死ぬべきだと聞いているものだから。さあ、落ちて着いて、挫けないでいてくれたまえ。」と制したソクラテスのように（『パイドン』817e）

「やめよ、アーナンダよ。悲しむな。嘆くな。わたくしは、あらかじめこのように説いたではないか、―すべての愛するもの・好むものからも別れ、離れ、異なるにいたるということ。およそ生じ、存在し、つくられ、破壊されるべきものであるのに、それが破滅しないように、ということが、どうしてあり得ようか。そのようなことわりは存在しない。アーナンダよ。おまえは、長いあいだ、慈愛ある、ためをはかる、安楽な、純一なる、無量の、身とことばとこのところとの行為によって、向上し来たれる人（ゴータマ）に仕えてくれた。アーナンダよ、おまえはよいことをしてくれた。努めはげんで修行せよ。速やかに汚れのない者となるだろう。」（MPS, V, 14. DN. Vol. II, P. 144）

アーナンダは、「尊い方よ。尊師は、この小さな町、竹藪の町、場末の町でおなくなりになります。尊い方よ。ほかに大都市があります。たとえば、チャンバー、王舎城、サーヴァッティ、サーケータ、コーサンビー、バラナシーがあります。こういうところで尊師はお亡くなりになってください。そこには富裕な資産者たちがいて、修行完成者（ブッダ）を信仰しています。かれらは修行完成者の遺骨を崇拜するでしょう。」ともらしているのも興味ある。同じ気づかいをした弟子の子路に、孔子は、「むしろ二三子の手死に死なんか。且つ予れ縦い大葬を得ずとも、予れ道路に死なんや。」と語ったが（『論語』子罕一二）、經典では、今はすたれているが、もともとこのクシナーラは大善見王の首都で、いかに栄えていたか、と由緒づけをし

たことになっている。

いよいよ命終というときに及んで、スバツダ (P: Subhadda, s: Subhadra) という遍歴行者が、亡くなる前にシヤカに会わしてくれ、と割り込んで来る。再三拒絶するアーナンダとの押し問答を耳にしたシヤカは、これを引見した。スバツダは、六師外道の名をあげて、どう思ふかと問う。

この閑話題のインドの「ニコデモ」に対して、シヤカは議論に立ち入らず、直截に、みずからの立場を証した。

「スバツダよ。わたくしは二十九歳で、なにかしら善を求めて出家した。スバツダよ。わたくしは出家してから五十年余となった。正理と法の領域のみを歩んできた。これ以外にはへ道の人ゝなるものも存在しない。第二のへ道の人ゝなるものも存在しない。第三のへ道の人ゝなるものも存在しない。第四のへ道の人ゝなるものも存在しない。他の論議の道（他派）は空虚である。―へ道の人ゝを欠いている。」(MPS. V, 27. DN. Vol. II, pp. 151-152)

ここに開眼帰依したスバツダはシヤカ最後の直弟子となった。

(6) 入滅・火葬

ついに臨終の説法となる。

「アーナンダよ。あるいは後におまえたはこのように思うかもしれない、『教えを説かれた師はましまさぬ。もはやわれらの師はおられないのだ』と。しかしそのように見なしてはならない。おまえたたちのため

にわたくしが説いた教え (dhamma) とわたくしの制定した戒律 (vinaya) とが、わたくしの死後におまえたちの師となるのである。」(MPS, VI, 1. DN. Vol. II, P. 154)

と、シヤカはここでも法中心を指さしており、これがやがて「法身思想」で人格化されてゆくことになる。

＊「仏教の教理は、もし仮に仏陀という考えをこれから取りのぞいてみても、本質的には変りはあるまい、と述べた人がいる(オルデンベルク『仏陀』)。なるほど、仏教にとって、とりわけ古い原始的仏教にとって、仏陀という人物のもつ意義は、キリスト教においてイエスの人物と生涯とがもつ意義と同じであるとは言えないのはもちろんである。仏教の中心にあるものは教理である。苦しみと、解脱にいたる認識への道とについての教理である。キリスト教の中心にあるものはゴルゴダにおける救済という一つの行為をなしたとげた救世主の姿である。キリストは弟子たちに言った「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ福音書二八・二〇)、また「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る」(ヨハネ福音書一四・一八)。これに反して仏陀はニルヴァーナ(涅槃)に入るまえに弟子たちに言った「私が入滅したあとは、これまで教えてきた教えを汝たちの師とするがよい」(マハーパリニツバーナ・スッタ)。原始仏教のみを考慮して理論的に観察すれば、仏教では教理がすべてであって、仏陀の人物はそこから導きだされるものであると思うのも無理はないかも知れない。しかしまた別の側からみると、もし仏陀がいなかったとすれば、仏教という教理があり得ないということも、わかりきった事実である。……」(ベック『仏教』上、二四頁)

「さあ、修行僧たちよ。おまえたちに告げよう、『もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修

行を完成なさい』と。これが修行をつづけてきた者 (tathāgata) の最後のうたばであつた。」(MPS, VI, 7, DN. Vol. II, pp. 155-156)

*「これによると、仏教の要訳は、無常をさることと、修行に精励することとの二つに尽きることになる。へ無常への教えは、釈尊が老いて死んだという事実によつてなによりもなまなましく印象づけられる。それがまた經典作者の意図であつた。仏教の本質は、ここに尽きるのである。ところが年代の経過とともにゴータマ・ブツダは仏として神格化され、仏の出現はまれであるとか、仏の身体がみごとであるとかいう神学的思弁が諸異訳のうちに附加されることになった。その経過についてワルトシュミットは詳細にたどつてゐる。(Ernst Waldschmidt: "Beiträge zur Textgeschichte des Parinirvāṣūtra" Von Ceylon bis Turfan. Göttingen, 1967, S. 80-88.) とくにパーリ本以外の諸本では、『諸現象は無常であるから、修行に精励せよ』という教えは、そのまま保存されているが、それよりも以上に、仏の出現はウドウンバラ華が花を開くようになまなましく珍しいことであるということのほうを、よけいに強調している。これはブツダの神格化の進行に正比例して説かれるようになったのだと考えられる。」(中村元、前掲書 II、三四七頁)

シャカは最後のことを残して禪定に入り、初禪(離生喜樂)、第二禪(定生喜樂)、第三禪(離喜妙樂)、第四禪(非苦非樂)と色界の四境地を進み、次いで無色界の形にとらわれない空無辺処、識無辺処、無所有処、非想非非想処の四禪定を進んで最高の滅想受定(滅尽定)に達したのち、今度は次第に下方の禪定へと進んで、最下の初禪に下り、そこからまた第四禪(非苦非樂)の境地へと次第して、いよいよ入滅したとされているのは、臨終時のシャカの精神状態はかくあらんと分析で、ことに四禪説に合はされているのは後

尊師が亡くなられたときに、亡くなられるとともに、神々の主であるサッカ（帝釈天）が次の詩を詠じた。――

『つくられたものは実に無常であり、生じては滅びるきまりのものである。生じては滅びる。これら（つくられたもの）のやすらいが安楽である。』

と。（MPS. VI, 10. DN. Vol. II, P. 157）

＊「釈尊の入滅は、生を受けたものの受ける自然の法の帰趨であり、罪の結果でもなく、したがってまた信徒の罪のための死でもない。ただ無常の理を示すのである。」（中村前掲書Ⅱ 三八六頁）。――これはキリストの死を視野におさめての評言であり、これが救贖者キリストの死と覺者シャカの死の根本的相違である。

入滅が八十歳とすると、渡辺照宏説ではBC四八〇年頃、宇井伯寿説だとBC三八六年、中村元説だとBC三三年となる。

＊日本では四月八日の「誕生」（佛生会・灌佛会・花まつり）、十二月八日の「成道」（成道会）、二月十五日の「入滅」（涅槃会）を三大節とする。南方佛教では三つともインド暦の第二月（ヴァイシャーカ、ウエサーカ）の満月の日（陰暦では五月ごろ）としている。

亡骸はクシナラーの住民マツラ族によってマツラの廟所である天冠廟（宝冠社）に安置。七日後にかけてつけた頭陀行第一で佛衣を授かっていた教団の長老マハーカシャパ（s: Mahākāśyapa 摩訶迦葉）の点火によって火葬に付された。シャカの遺体は布と綿で五百重に包まれ、鉄の油槽に二重に入れられ、香料を含む薪に

よって荼毘に付された (MPS. VI, 17-18. DN. Vol. II, pp. 161-162)

未熟な修行者は悲嘆にくれ、成熟した修行者が堪忍する中に、年老いて出家したと言われるスバッタ (p: Subhadda 須跋) という修行僧が、その時機にふさわしからぬことを発したことが録されている。

「やめなさい、友よ。悲しむな。嘆くな。われらはかの偉大な修行者からうまく解放された。へこのことはしてもよい。このことはしてはならない」といつて、われわれは悩まされていたが、いまこれからは、われわれはなんでもやりたいことをしよう。またやりたくないことをしないようにしよう。」 (MPS. VI, 20. DN. Vol. II, P. 162)

はたして、このスバッタが命終のシヤカに六師外道の評価を問うて割り込んだ最愛の弟子スバッタか、別人であったかはわからないが、キリストの場合も、復活時にトマスがあり、昇天時にも疑う者がいたことが思い合わされよう。

「尊師の遺体が火葬に伏せられると、膚も、皮も、肉も、筋肉も、関節滑液も、その燃えがらの灰が認められないで、遺骨のみが残った。……マツラ族は尊師の遺骨を、七日のあいだ公会堂のうちに置いて、棺の垣をつくり、弓の柵をめぐらし、舞踊・歌謡・音楽・花輪・香料をもって、尊び、敬い、供養した。」 (MPS. VI, 21-23. DN. Vol. II, pp. 163-164)

*「このような法要に音楽や舞踊を用いることは、出家仏教では禁止されている。比丘の二百五十戒や沙弥の十戒の中に、娯楽物の享受を明瞭に禁止している。従って、部派教団の中で音楽や舞踊、演劇、あるいは美術・建築などの芸術が発達したとは考え難い。これらのものは、現世肯定的なものであり、現世からの脱出をねがう部派の出家仏教の思想とは矛盾する。この仏塔供養に関連して発達した音楽や舞踊、芸術などが、大乘仏教に取り入れられ、発達している。音楽と舞踊とを併用する伎楽などは、大乘

仏教と共に中国や日本に伝えられたのである。かかる点からも、仏塔供養が部派教団から生じたものでないことが知られる。」(平川彰『インド仏教史』上、三四七～三四八頁)

シャカがクシナーラーで亡くなったとの報が伝えられると、七部族の使者が派遣され、当地のマツラ族も加わって、遺骨の分配で争い、ドーナ(Dōṇa)というバラモンが仲裁に入って、八等分された。ドーナは功績によって舍利瓶を与えられた。また遅参したモーリヤ族の使者は灰を得た。こうして、八つの舍利塔と瓶塔と炭塔と十の記念塔(s: Stūpa 率都婆)が建つられた。

*一八九八年に、北インドのピプラーワー村(s: Piprahwa)で、「これはシャカ族の仏・世尊の遺骨の龕であって、名誉ある兄弟ならびに姉妹・妻子どもの「奉祀したもの」である」と刻文された骨壺が発見され、タイ王室に譲りわたされた。明治三十三年に日本へ分骨され、名古屋市千種区東山の覺王山日泰寺(旧・日暹寺)のガンダーラ式宝塔に納められ、十九宗派の管長が交代で輪番の制度となっている。遺骨を納めた舍利壺はカルカッタのインド博物館に厳重保管されている。その諸話題については中村元前掲書Ⅱ、四三一～四三七頁に詳しい。

シャカの教法は入滅後四ヶ月にラージャガハ(王舍城)郊外の七葉窟で五百人の長老が召集して、マハーカーシャパ(摩訶迦葉)を中心に結集される。十大弟子中、常随・多聞第一のアーナンダ(s: Ānanda 阿難陀)が教説(経)を、持戒第一のウパーリ(s: Upāli 優婆離)が規則(律)を、それぞれ記憶に従って誦出し、衆僧これを校訂して、制定された。五百「結集」(saṅgīti)である。その教法は南方系のパーリ語聖典、北方系の漢訳經典などで伝えられる。

* 以上、「新約聖書の受難の生涯 (Passionsgeschichte) に比較し得るような事件は、ブッダの生涯および死には存在しなかった。完成せる人 (如来) にとっては実に生起 (Geschehen) は存せず、苦ももはや存在しなかった。」(H. Oldenberg: Aus dem alten Indien, S. 46)

* 「ケルン (H. Kern) はその大著『仏教』(Buddhismus und seine Geschichte in Indien) の中で、『仏陀の本性を一口でいうならば古高ドイツ語の *nanno mitisto* という言葉を用いるのがもっともよからう』、と言っている。いかにも、気品をそなえた柔和と慈愛こそは、このたぐいなき人物のもっとも著しい特質をなしている。この柔和を芸術的に表現して人を感動させるものは、日本の鎌倉の大仏に見られる顔つきである。その仏像は、粗暴な、怒った、不親切な言葉などがこの人の唇から漏れたことは決してないことを、われわれに告げようとしているように見える。仏陀のもうひとつの本質的な特色は一種の冷静な自制心であって、これが、仏教ぜんたいの特質である非人間的な感じを仏陀に与えている。」(ベック『仏教』上、岩波文庫、一三三頁)

結びに上来、引用して来た、シャカの最後の旅から入滅、火葬、起塔までを追って叙述する『大般涅槃經』(p: Mahāparinibbāna-suttanta A D 三〇〇年ごろ成立) の結語をあげておく。

「げにブッダは百劫にも会ふこと難し」と。(MPS. VI, 28. DN. Vol. II, P. 168)

へ主題の「シャカの超人化・神格化」を述べるためには、シャカの実伝が下敷きとならねばならず、この第一部は、その略記となった。經典は中村元訳文で統一したので、その抜萃集のようになった。感謝と共に御了承を乞う。

〈略号〉

S (サンスクリット語)、P (パーリ語)。

DN. Dīgha-Nikāya 南伝大蔵経・長部経典。

MN. Majjhima-nikāya 中部経典。

MPS. Mahāparinibbāna-suttanta 「大パリニッバーナ経」(大般涅槃経)。

Jātaka ジャータカ (本生経)。Nidānakatha (因縁物語)。

SN. Saṃyutta Nikāya 相應部経典。

Therīg. Therīgāthā (長老尼偈)。

Vinaya 律蔵。mahāvagga 大品。

大正蔵 大正新脩大蔵経。

(実践神学・名誉教授)